慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	A. シュッツの時間論の展開と, その現代的意義の解明
Sub Title	
Author	鳥越, 信吾(Torigoe, Shingo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014.) ,p.163- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成25年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000078-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成25年度
博士課程学生研究支援プログラム
研究成果報告

A. シュッツの時間論の展開と，その現代的意義の解明

鳥　越　信　吾

1. はじめに

本研究は，アルフレッド・シュッツの時間論の，特にその「積み重なる」時間観について検討するものである。

流れのメタファーで表されるような等質的で計量可能な直線的時間は，しかし唯一の時間の捉え方ではない（浜 2010: 467）。とりわけ19世紀以降，時間の問題に特別な関心を払ってきた哲学者たちは，さまざまなかたちでこの直線的時間とは別の時間の姿を示そうとしてきた。そのうちのひとつに，エドムント・フッサールが「把持（Retention）」概念でもって示した積み重なる性質をもつ時間が挙げられる。そうした積み重なる時間を，野家啓一は「垂直に積み重なる時間」と呼び，それを流れ去る性質をもった直線的時間である「水平に流れ去る時間」に対置している（野家 1996［2005］）。この時間観の最大の貢献は，過去と現在とを，直線上の相互に独立した点としてではなく，むしろ積み重なった過去（歴史）と，それによって支えられた現在，という相互関係のうちで理解する視座を築いたことにある。

この積み重なる時間観は，近年の社会学においても，物語論，記憶論，場所論，習慣論など，さまざまな領域において着目され，独自の展開をみている（Bourdieu 1980＝1988; 浅野 2001; 浜 2010）。しかしながら，上述の社会学諸派のなかで展開されている積み重なる時間観においては，過去と現在との関係には十分に配意がなされている一方で，時間的未来への言及が必ずしも十分ではない。これをふまえ本研究は，社会学における積み重なる時間観の祖の一人とも位置づけられるシュッツの理論について検討することを通して，この時間観のなかでの未来の性質を理論的に精緻化することを目指した。

2. 研究内容

本研究はまず，シュッツが『社会的世界の意味構成』（Schutz［1932］2004＝2006）で展開している，現象学的時間論について確認した。シュッツはそこで，フッサール由来の「把持」概念に依拠しつつ，積み重なる時間について記述している。把持とは，前述定的につねにすでに作用している志向性であり，現在の印象に与えられた諸体験を現在野のなかに保持する作用である（Schutz［1932］2004: 141–3＝2006: 71–82）。この把持の作用によって，時間は過去に流れ去ることなく現在において積み重なることになる。

把持によって積み重なった時間は，把持と同じく前述定的な志向性であるが，把持とはぎゃくに未来に向かう作用である「予持（Protention）」を基礎づけるものとなる（Schutz［1959］1962: 146＝1983:

232)。つまり，シュッツにおける積み重なった時間は，「類型の網目を広げて，到来するものを待ち受ける」(千葉 1994: 348) 作用である予持を通じて未来に投げかけられ，「予期 (Erwartung)」の可能的な枠を形成する。本研究がここで確認したのは，シュッツが積み重なる時間にもとづくものとして未来を描いていることであり，またこのようにして描かれた未来が，ピエール・ブルデューがハビトゥス論において描く未来像や，フッサールが描く未来像と相同的だということである (Bourdieu and Wacquant 1992＝2007: 170–1; Husserl 1939)。本研究は，過去の反照として描かれるこの未来像を，フッサールの表現を借りて「既知の一様態 (ein Modus der Bekanntheit) としての未来」(cf., Husserl 1939: 34) として特徴づけた。だが，シュッツ理論のうちには，「既知の一様態としての未来」にはとどまらない，第二の未来像を見出すことができる。次いで本研究が目指したのは，この第二の未来像を析出することである。

まず本研究は，『レリヴァンス問題の省察』(Schutz 1970＝1996, 邦題は『生活世界の構成』) に焦点化し，シュッツが「知られていないもの」を分析するさいに提出している三つの類型について整理した。シュッツによれば，「知られていないもの」には第一に，「私がいまだ一度も探究しようとしたことがないという理由で，私にとって知られていないもの」(Schutz 1970: 149＝1996: 209) としての「達成可能 (attainable) な知識」(ex., 普段乗車している電車の動くメカニズムを知らないこと)，また第二に，「かつて実際に知られていたけれども，もはや実際には知られていないもの」(Schutz 1970: 149–50＝1996: 210) としての「回復可能 (restorable) な知識」(ex., かつて学習した三平方の定理の証明過程を忘れてしまったこと)，そして第三に，「われわれに知られておらず，またこれまで一度も知られていない」(Schutz 1970: 151＝1996: 211) として特徴づけられる，知識の「真正な空隙 (genuine vacancy)」の三つの種類がある。

そして本研究は，これら三つの「知られていないもの」と予持の作用とがどのような関係をもつのかということを検討した。その結果，前二者は「潜在的には知ることのできる知られていないもの」，つまり予持されたものであるが (Schutz 1970: 151＝1996: 211)，一方で最後の「真正な空隙」は，「絶対的に知られていない」もの，つまり予持されてはいないものであるということが明らかになった (Schutz 1970: 71＝1996: 114; Nasu 2006: 392)。だが，シュッツは，この「真正な空隙」との関わりのなかで到来する「新奇な体験」(Schutz 1970: 135＝1996: 193) という体験類型を認めており，そうである以上，シュッツ理論のうちには予持の関わりえない新奇な体験がそこから到来する第二の未来があることを想定することができる。本研究は，この第二の未来を「非知の未来」と名づけた。この未来像は，シュッツと同じく積み重なる時間について理論化するブルデューやフッサールの理論枠組みには十分に見出せない未来像であり，シュッツの時間論のオリジナルな部分であると考えられる。

3.　本研究によって得られた結果と，今後の展開可能性

本研究は，「垂直に積み重なる時間」という時間観における未来像の解明という目的のもとに，シュッツの時間論について検討してきた。その結果，シュッツ理論には，原理的には予期されうる「既知の一様態としての未来」と，予期されえない「非知の未来」とが見出されることが明らかになった。

今後本研究は，とりわけ後者の未来像に焦点化し，これを——他の社会理論における未来像との比較も行ないつつ——精緻化することを目指していく。だがそのためにまずは，シュッツ理論内在的に，後者の未来像を論じるうえでの核となる新奇な体験概念についてさらに解明することが必要であるとおも

われる。ただしこの概念は，彼が晩年にその展開を企図してはいたが，しかし彼の突然の死によって途絶してしまった「空隙の哲学Philosophie der Leerstelle」（Schutz 1970: 162–166＝1996: 223–7）と呼ばれるプロジェクトのなかで集中的に議論されるはずであった概念であり，それゆえ彼の現存する諸著作においては部分的に触れられているにすぎない。

しかしながら，この新奇な体験概念と，彼の多元的現実論とは密接な関係をもっており，それゆえ今後は彼の多元的現実論を通じて，新奇な体験という概念について解明していくことが可能である。シュッツは新奇な体験を「超越の経験」として特徴づけているが（Schutz 1970: 148＝1996: 208），より詳しく見れば，新奇な体験は彼が「超越の経験」に設けた「小さな（kleine）超越」と，「大きな（große）超越」との区別における，後者の類型に該当する（Schutz＝Luckmann 2003: 597ff.; 那須 1997: 67–8）。というのも，新奇な体験と「大きな超越」の経験とはともに，「習慣性の解体」（Schutz 1970: 124＝1996: 177），すなわちそれまでに自身が現実を解釈するために依拠してきた知識集積の根本的な組み替え，これを経験者に要請するものだからである。そうであれば，新奇な体験は，シュッツの多元的現実論に密接に関連することになる。なぜなら，彼が多元的現実論を提示した目的の一つは，人が「大きな超越」に対処するその仕方を解明することにあるからである（那須 1997: 172）。したがって，本研究は今後，多元的現実論との関連で新奇な体験概念の解明を行なっていくことを目指すものである。

付記　本報告書は，『日仏社会学年報』（2013, 24号：89–101）に所収の拙著「A.シュッツにおけるふたつの未来：積み重なる時間の展開に向けて」および，2013年10月28日にEugeneで開催されたSociety for Phenomenology and the Human Sciences 2013 Annual Meetingでの拙報告“Multiple Realities and Novel Experience”をもとにしている。

文　献

浅野智彦，2001,『自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ』勁草書房.

Bourdieu, P., 1980, *Le Sens pratique*, Les Editions de Minuit.（1988, 今村仁司・港道隆訳『実践感覚1』みすず書房.）

Bourdieu, P., and Wacquant, L., 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press.（2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待：ブルデュー，社会学を語る』藤原書店.）

千葉胤久，1994,「予期の現象学：フッサールの予期の分析を手がかりにして」『文化』，57(3): 25–43.

浜日出夫，2010,「記憶と場所：近代的時間・空間の変容」『社会学評論』，60(4), 465–479.

Husserl, E., 1939, *Erfahrung und Urteil*, Prag: Academia Verlagsbuchhandlung.

那須壽，1997,『現象学的社会学への道』恒星社恒星閣.

Nasu, H., 2006, “How is the Other Approached and Conceptualized in Terms of Schutz's Constitutive Phenomenology of the Natural Attitude” *Human Studies*, 28(4): 385–396.

野家啓一，［1996］2005,『物語の哲学』岩波書店.

Schütz, A.,［1932］, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*. 2004, *Alfred Schütz Werkausgabe II*. UVK.（2006, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社.）

Schutz, A.,［1959］, “Husserl's Importance for the Social Sciences.” 1962, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Nijhoff.（1983, 那須壽・西原和久・渡部光訳「社会科学に対するフッサールの重要性」『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻』マルジュ社.）

————, 1970, *Reflections on the Problem of Relevance*, Yale University Press.（1996, 那須壽・浜日出夫・今井千恵・入江正勝訳『生活世界の構成：レリヴァンスの現象学』マルジュ社.）

Schütz, A., und Luckmann, T., 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, UVK, Verlag.